高知県立坂本龍馬記念館だより 2011（平成23）年10月 第79号

高知県立坂本龍馬記念館 The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

龍馬（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

三思 SANSHI KYUSHI 九思

いちむじん

竹内土佐郎

西村直記

大石すみれ

北代淳二

坂本　登

前田由紀枝

山本正子

藤田紅子

辻真由子

宜保然樹

髙山みな子

ハワイ、ニューヨークで5回のフォーラム

いよいよ最終章。「風になった龍馬VOL.3―時代は未来へ」

館では企画展、「龍馬とアメリカ」

坂本龍馬記念館20周年の節目の年が「東日本大震災」発生の年となった。2万人を超える命が、一瞬のうちに消されたのである。龍馬記念館では11月に予定している20周年式典の内、祝賀パーティーは中止と決めた。しかし、式典、シェイクハンド龍馬像の除幕式などは計画どおりである。また、同月15日の龍馬生誕日には桂浜で、震災を忘れない鎮魂と龍馬記念館の新しいステップを刻む決意の意味を込めて「手筒花火」のパフォーマンスを予定している。

10月のアメリカフォーラム（10月11日・14日）は震災の発生が、〝龍馬をアメリカで発信する〟という意味づけを一層深いものにしたのではないかと考えている。福島原発に象徴される問題は、人類の危機を暗示している。アメリカフォーラムで坂本家9代、坂本登さんらは「地球は一つ、一隻の船。地球上に降りかかる問題は世界人類が手をつないで解決しよう」と訴える。まさに龍馬精神である。

その思いをバックアップする館の企画展は、混乱の幕末期、龍馬が新しい国づくりの理想として頭に描いたアメリカの〝自由と平等〟の原点に迫る。10月1日（土）から来年1月13日（日）までとなる。ジョン万次郎、勝海舟が絡んでくるのは言うまでもないが、これを見た入館者の皆さんが龍馬になって〝龍馬ならどうする、どう考える〟というような想像力を掻き立てる展示を狙っている。

〝龍馬一座〟の勢いで

アメリカフォーラムは10月11日ハワイで2回、同14日ニューヨークで3回、合計5回が決まった。ハワイでは午前中プナホウ高校、夜はハワイコンベンションセンターが会場になる。また、ニューヨークは午前中ジャパンソサエティ、午後、学校訪問、夜はNPO法人・ジャネット会館と3連続になる。参加者は会場によって一般から学生までそれぞれ。最後のジャネット会館はニューヨーク在住の日本人が対象である。

また、ハワイコンベンションセンターにはホノルル日本総領事館の加茂佳彦総領事。ニューヨークジャパンソサエティにはニューヨーク日本総領事館の廣木重之総領事・大使の出席も決まって、フォーラムはさらに盛り上がる勢い。龍馬・海舟・万次郎、子孫の3人と選ばれた高校生、大石すみれさん、辻真由子さん。音楽で脇を固めるのはシンセサイザー演奏、西村直記さん、ギターの「いちむじん」の二人、書道は、柔道の指導者でもある竹内土佐郎さん。竹内さんは黒帯びの柔道着姿で、実力の書家、藤田紅子さんは和服姿で二人が並んで筆を握る。帽子デザイナー山本正子さんの〝幕末の志士帽子展〟も喜ばれそうだ。それに、龍馬好きの一般参加の方々も加わると総勢40人に近い。まさに〝龍馬一座〟である。英会話の訓練をしながらその日に備えている。

森　健志郎

風になった龍馬 VOL.3

アメリカを通して三人が見た新しい日本の未来

2009年に始まった3年連続企画展も、いよいよ今回で最終回となる。第1弾「時代の不思議」、第2弾「時代の力」に続き、開館20周年にあたる本年は、「時代は未来へ」という副題で展示を行う。

一昨年、昨年の展示では、龍馬・勝海舟・ジョン万次郎の三人をつなぐ「海」や「船」をテーマにしてきた。本年はそれらに加え、10月に開催されるアメリカフォーラムをふまえて、「アメリカ」をめぐる3人の思想を加えた展示を企画している。

EPLURIBUS UNUM

今回、ジョン万次郎とアメリカをつなぐのは〝EPLURIBUS UNUM〟という言葉である。これは、「多くのものから創られたひとつ」という意味のラテン語で、現在も国章や通貨に刻まれている、アメリカの建国精神や国家そのものを象徴する言葉である。漂流の末アメリカに渡り、教育を受けた万次郎は、自分たちを救助してくれた捕鯨船ジョン・ハウランド号の船尾にこの言葉が刻まれている様子を、帰国後、絵師の河田小龍に伝えた。その絵は現在も「漂巽紀略」のなかに見出せる。

公正無私を訴える

蘭学を学び、長崎海軍伝習所で航海術を身につけた勝海舟は、万延元年（1860）、咸臨丸艦長として渡米した経験を持つ。慶応3年（1867）12月、老中に提出した幕臣の暴発を制する上書に対し、逆に薩長とのつながりを疑われた海舟は、「憤言一書」と題する辞表を認めた。そのなかで、建国に貢献しながら職を私のものにしなかった初代大統領ジョージ・ワシントンを例にとり、幕閣が公正無私に帰することを訴えた。幕末、多くの知識人がワシントンやナポレオンなどの事績に注目したが、そうした背景や神戸海軍操練所、神戸の勝塾に関わる資料を展示したい。

海外への想い

龍馬に関しては、海外に渡航したことを示す史料は見つかっていない。しかし、政治や経済、社会状況などアメリカの事情については、万次郎の経験を河田小龍経由で、また師である海舟からは直接、伝え聞いたものと思われる。龍馬自身、「勢ニよりてハ海外ニも渡り候事もこれ可有」（文久3年8月19日川原塚茂太郎宛書簡）と語っているように、海外への希望を持っていたことが窺い知れる。

機会の少ない貴重な資料

万次郎や海舟、さらに福井で出会った横井小楠らの影響を受け、龍馬は新しい国家のかたちを模索してゆく。薩長同盟成立後、土佐藩を政治舞台に参画させる思惑で一致した龍馬と参政後藤象二郎は、龍馬の「船中八策」をベースに、大政奉還への道筋を開いた。「船中八策」の内容を発展させたといわれる「新政府綱領八策」（複製）や、五箇条の御誓文の基となった「議事之体大意」（写真）も展示予定である。実際にアメリカを見た万次郎・海舟と、二人の影響を受けた龍馬が、アメリカを通して見た新しい国家のかたちと、それが明治以降の新しい日本の誕生にどのように投影されたかを、展示を通じて示したい。

今回の展示では、「議事之体大意」が福井からはるばるやってくる。他にも「大政奉還建白書副書写」や、海軍に志を抱き奔走する龍馬の思いが吐露された慶応2年（1866）11月溝渕廣之丞宛書簡など、真物を見られる機会の少ない貴重な資料を展示する。是非お見逃しのないようご覧いただきたい。

亀尾　美香

「議事之体大意」福井県立図書館蔵

「大政奉還建白書副書写（部分）」足立隆文氏蔵・高知県立歴史民俗資料館寄託

アメリカフォーラムの助走

ニューヨーカー教員たちの高知研修

―フォーラム会場となるNYジャパンソサエティとの共催　7月6～11日―

ニューヨークジャパンソサエティは日米の相互理解と交流のために創設された100年以上の歴史を持つ民間組織です。その教育部が毎年開催する教員のための日本研修を今回は高知で開催しました。開催決定から一年近く、JR高知駅で参加教員と初めて対面したとき、私はいよいよアメリカフォーラムが始まるのだという思いがこみ上げてきました。それからの数日間、暑い夏でも特に暑かった日々を懐かしく思い出します。

中、高校教員である研修生はニューヨークフォーラムを後押ししてくれる大きな役割を持っています。高知で龍馬を知り、所属校の生徒たちを参加させようという意思もあるからです。土佐塾高校、高知市立愛宕中学校、昭和小学校、さえんば保育園などのご協力で学校視察し、授業以外にも書道、茶道、よさこい鳴子踊り、クラブ活動などに参加しました。そこで彼らは何を見て何を感じたのか。それを理解する小さなエピソードがあります。

授業で交流した生徒たちと記念撮影するニューヨークの教員たち＝土佐塾高校で

高知市立昭和小学校のウエルカム集会、アメリカ国歌『星条旗』が児童によって演奏されたときのことです。音楽が流れ始めた瞬間、ある先生が手を胸に置き、涙ぐんだのです。「高知で国歌を聞けるとは思わなかった」と言います。

私はハッとしました。多民族で形成される大国をひとつのメロディーがつないでいる。それはまた、言語や人種を超えて、人類がつながっていける何かがあるということではないか。それこそが自由と平等、平和への道ではないか。それを探す場がアメリカなのだ、と。フォーラムが見えた瞬間でした。

東日本大震災に伴う福島原発事故の影響で、参加キャンセルした教員もいると聞きましたが、選抜されて来高した中・高校の先生たち八名は意欲的でした。日本の地方都市で過ごしたわずかな時間。しかし密度の濃い時間の中で、ホストファミリーとも家族のような気持ちが芽生えていました。

坂本龍馬についてほとんど知らなかった彼らは帰り際、口々に「リョウマ、リョウマ」を連発し、「生徒たちを連れてフォーラムに参加します。ニューヨークで会いましょう」と言いました。

アメリカが近づきました。

前田　由紀枝

龍馬と土佐西南部の勤王志士展総括

◆さらなる解明と調査◆

今年は土佐勤王党が結成されて150年という節目の年で、県内の博物館5館が連携して勤王党展を開催した。

当館では西南部の勤王志士を担当したが、資料が少なく準備不足は否めなかった。人物としては、まだまだスポットが当たらないままの人たちが多くいるので、今後長期的な視野に立って資料集めを行いたい。特に葉山出身の千屋兄弟など、高岡郡には興味深い上、勤王党にとっても重要な人物が多いので、重点的に調査を行っていきたい。

勤王党は決して一枚岩の集団ではなかったため、各地域の個々の加盟者を調べることによって、各地域での考え方を掴むことができると考える。勤王党は現在、大きく分けて東部・中央部・西部で捉えられているが、今回の展示を準備していて、高岡郡や津野山郷辺りの党員は、中央部とも西部とも少し括りにくい独自の動きがあったように思う。こういう地域の解明が今後の課題となってくる。

また、勤王党の意義についても、勤王党が活躍したわずかな期間だけでなく、前後の時代背景などとともに研究を進めることによって、見直しが必要な部分も出てくると思う。

その際、特に重要なのが、当館が所蔵している京都土佐藩邸史料である。上士側から見た史料で、脱藩した勤王党員らの動向に目を光らせた史料であるため、脱藩した党員が幕末動乱の中心地である京都周辺で、どのような活動を行っていたかを明らかにできる。そして、その活動を土佐藩がどう捉え、対処していたのかも知ることができる。

企画展は終了したが、引き続き県内博物館や研究者と協力して、さらなる勤王党の解明を行っていきたい。

三浦　夏樹

「鍔は知っている！」⑦

土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会　現代龍馬学会
小島一男

前回までのあらすじ

紀州藩の「明光丸」（887トン）と「海援隊」のチャーター船「いろは丸」（160トン）が讃州、箱の崎沖で衝突、「いろは丸」が沈没したのは慶応3年4月23日。日本では蒸気船同士の事故としては初めてのものであった。紀州藩と土佐藩の交渉は龍馬らの活躍でわずか1ヶ月で、土佐藩の大勝利でけりがついた。これを機に龍馬と土佐藩参政、後藤象二郎の信頼関係は深まっていく。少なくても龍馬は〝土佐藩で最も信頼できる人物〟と評価する。大仕事、大政奉還に向けての二人の行動は、二人三脚とさえ思えるのである。「自由亭」での慰労会が始まった。

（四）容堂公瓢箪の証

龍馬は紀州藩との談判に当たり、ことと場合によっては死をも覚悟していたものである。確かに龍馬らは考えられるあらゆる手を使って紀州藩を追い詰めていった。だが、誰もが予想だにしなかった大勝利の決着が出来たのは、最終的に後藤象二郎が談判に加わったのが大きい。龍馬もそれを十分に理解していた。「清風亭会談」以来の信頼関係をさらに深めることになった。今日「自由亭」の会食は龍馬が献立た慰労会のようなものであった。リラックスした気分の中で話は弾んだが、龍馬には一つ気になっていることがあった。シャンパンが一本空いたころ、龍馬が話を切り出した。

「後藤様、わしは刀が大好きじゃけんど、最前拝見させてもろうた『左行秀』のお刀、名刀『正宗』にも見まがう、まっこといい刀ですのう。わしも権平兄やんに譲ってもろうて持っちょりましたけんど・・・今は、この吉行を愛用しちょります。手持ちがいいのと〝なんでも吉行（ヨクイク）とごろがいいので、気に入っちょります」

「ウム、吉行も土佐の刀じゃったのう」

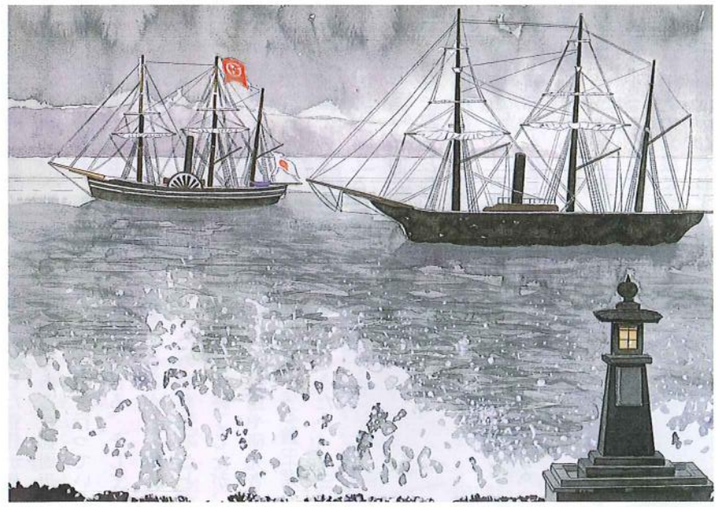
「はい、上野守吉国の弟でござります。わが坂本家伝来の刀ですき、これを持っちょりますと、なんとのう土佐の家族と一緒におるような気がするがです」。言いながら、刀の柄を撫でている。

「後藤様、鍔のことですけんど『明珍紀宗義』の鍛錬場は家の近所やき、こんまい頃からよう知っちょります。先日、聖福寺で「一心不乱にの宗義」鍔をめぐって言われよりましたねえ『左幕の象徴』とか『容堂公の身代わり』とか。そのいわれ、いきさつなどお教え願えませんろうか。気になることがあるがです」と続けた。

「それはのう、坂本君！」と象二郎は少し居ずまいを正した上で、「一心不乱にの宗義」鍔の意匠と、その鍔に秘められた容堂公の熱い思いを語った。その上で、後藤はくだんの鍔の櫃孔の瓢箪を指さしながら「容堂公はよくこう申された『この瓢箪は、この容堂よ』と」。話す後藤はまるでその場に容堂公が居るかのように頭を下げた。

その様子に、龍馬が声を上げた。

「やっぱり！あの時の瓢箪は!!」。龍馬はテーブルを叩いていた。今度は後藤が驚いた。龍馬の呟きが聞えた。「容堂公瓢箪の証」。首かしげる後藤に興奮した面持ちで龍馬が語り始める。



容堂が乗った「大鵬丸」　（画）和田 通博

「あれは、忘れられん出来事じゃった」。

文久三年二月二十五日、龍馬は京都河原町の土佐藩京都屋敷にいた。実はその日、容堂公より脱藩罪の赦免書が交付され、龍馬の罪は七日間の謹慎処分で許され、さらに「帰国御免」となった。そして翌三月改めて航海技術修行が命じられる寛大なものであった。当時、脱藩は重罪で、死罪となってもおかしくなかった。龍馬がこのような軽い処分で済んだのは、理屈付けられる理由があったというより、偶然と言える経緯があったように思われる。龍馬が龍馬として今日の評価を受けることが出来た背景にはいくつかの偶然が重なって初めて可能でなかったのかと、筆者は想像している。と言うより、龍馬には「偶然」を「必然」に変える能力があったのかも知れない。

前年の文久二年二月二日、徳川将軍家十四代家茂に皇女和宮が降嫁し、「公武合体」は一応成功した。しかし、その条件として「尊王攘夷」強硬派、三条実美、姉小路公望等、若手の公家（その背後に『土佐勤王党』武市半平太、長州の過激派久坂玄瑞らがいた）によって文久三年三月に将軍上洛、五月十日には攘夷決行との難題を押し付けられ、幕府はしぶしぶこれを受けた。

文久二年十二月十七日、幕府の重役、軍艦操練所頭取であった勝海舟は、海路上洛のため幕府の艦船「順動丸」で品川を出航した。勝の門下生であった坂本龍馬、高松太郎、千屋虎之助、望月亀弥太ら数名の土佐藩関係者が乗り組んでいた。そして彼らはこれが処女航海であった。

航海の目的は、将軍家茂に伴い上洛する老中格、小笠原長行に随行するためである。

山内容堂も文久三年一月十一日、朝廷より急ぎ上京するようにとの命を受け、品川より幕府の用意した「大鵬丸」で出航した。マストには土佐三柏御紋のフラフをなびかせて。しかし「大鵬丸」は船籍は筑前藩、船将は黒田藩士、松本主殿、航海技術顧問は幕臣、小野友五郎、加藤安太郎というにわか仕立ての雇い乗組員であった。加えて「大鵬丸」は嵐に弱い外輪型の老朽船、そんな事情で、酒には強いがとかく乗り物には弱い容堂公を安じる声があったのも事実である。そして、その心配が的中することになる。

勝海舟

その日の夕方、「大鵬丸」は強くなった西風を避けて伊豆下田に入港し、宝福寺を本陣とした。強風状態は翌日も続いた。十三日も。しかし、よほどたまりかねたのだろう同日夜に無謀と思える出港である。結果、十四日夜「大鵬丸」は下田港に逃げ帰ってきた。まさに死ぬ思いの帰港だったろう。側近の寺村左膳の日記によると、「・・下宿にて蘇生の祝い酒を呑み大酔せり・・」と、乾（板垣）退助等と命を拾った喜びの酒を呑んだと記されている。

一方、勝海舟は「順動丸」で無事、小笠原長行を送り届け同月十三日兵庫港を出港、帰路についた。その途中、「大鵬丸」と同じに嵐に遭遇する。十五日に同じ下田に避難することになった。

山内容堂

勝は「大鵬丸」に翻る土佐三柏御紋のフラフを見て容堂が居ることを知った。また、船将の判断ミスで「大鵬丸」が死ぬ思いで引き返して来た状況などいきさつを知る。その勝の元へ、容堂から招きの使者が来た。勝の元には土佐藩脱藩の坂本龍馬がいる。脱藩者のままでは、龍馬のためにならないと赦免の機会を狙っていた勝にとって、まさに千載一遇のチャンス到来だ。

「こりゃあ、願ってもない好都合、嵐もたまにゃあいいことするじゃねえか」ひざを打って喜んだ。

ただ、誘った容堂にも理由はあった。単に徒然の伽に招待したのではない。船将や航海技術顧問の判断ミスで散々な目にあった。胃液を出し尽くすほどの船酔いである。その怒りを軍艦奉行の勝にぶちまけるのと、嫌がらせに、酒の呑めない勝に無理やり呑ませて酔っ払わそう、そうでもしないと腹の虫が治まらぬと言うわけである。

文久二年から慶応三年までの六年間、容堂のお側小姓を勤めた秋山久作は、この日のことを後に語っている。それこそ片時も離れず容堂に仕えた久作の言葉だけに、容堂の思いまで伝わってくる。例えば、容堂公が非公式の場では、側近や親しい者にはお国言葉で話すことがあったなどは、久作ならではの話だろう。多分「こじゃんとええ酒の相手が出来たき、うまい酒が呑めるぜよ。のう久作」こんな風でなかったかと想像される。

十六日宝福寺を訪れた勝は、容堂の待つ酒宴の席にまっすぐ通された。容堂の側には、船将の松本、航海技術顧問の小野、加藤の三人が裃正して控えている。彼らを横目で見ながら勝は容堂に深々と頭を下げた。

「容堂公にはご機嫌麗しゅう・・・・いやいやご機嫌斜めにござりましょう」挨拶しながら、今度は控えた三人に向かって

「貴殿等の此度のお役目大任でございます。国主たる大名が始めて海路でのご旅行なれば、いかに急ぎの御用とて、状況判断に無理があってはなりませぬ。出来る限り極上の天候を見計らい出航すべきでしょう。然るに今回の不始末、もしものことあらば如何いたす御所存か。以後、厳重にご注意めされよ!!」。

この勝の叱責、剣幕に三人は恐れ入った。中でも小野はあの「咸臨丸」で航海長を務めた当時日本屈指の航海技術者だったが勝の迫力に返す言葉はなかった。

この様子に容堂は大いに溜飲をさげた。勝の人物、器量を改めて見直し感心し、上機嫌となった。勝は、容堂に向き直り「なにとぞ、今回はこの勝に免じてお許しのほど、お願い申仕上げます」と再度頭をさげる。その謝罪の言葉をみなまで聞かず容堂は

「勝さんようきたねえ。まあこっちへきいや。もそっとこっちへ」。容堂の手招きに、勝は恐縮しつつにじり寄った。

（次回に続く）

参考

小野友五郎のこと

万延元年（1860）正月、勝海舟が艦長を務め、日本人として初めて太平洋を横断した「咸臨丸」で航海長として活躍した。その測量、航海技術の高さに、技術指導役として同乗していたジョン・M・ブルック米海軍大尉を驚かせた。日本初の軍艦建造、鉄道敷設さらに製塩技術の改良等々、幕末、明治期の日本でその力を遺憾なく発揮した。明治31年没（82歳）

拝啓 龍馬 殿

6月21日～9月20日

409通

戻んてきたぜよ！やっぱりここに来ると色んなことを振り返って考えて、良い事も悪い事もリセットできます。去年より、今は他人を大切に思うことができるようになったと思うよ龍馬さん。まだまだ志士見習いだけど、志士になれるよう頑張ってまた来ます。
（7月11日　岐阜　F・O　女性）

台湾から来た留学生です。歴史が好きで特に幕末に興味があります。（中略）龍馬さんは国のためにいろいろ考えて、そして行動に移しましたが、大学四年生の私はいまだに将来のことを決められず、迷っています。しかし桂浜の海、景色を見て、なんとなく未来がそんなに恐いものではないと思いはじめました。私も龍馬さんのように心の強い人になりたいです。（7月22日　東京　R　22歳）

小学生の時に初めて来て以来二度目です。念願が叶い、息子と家族三人で来れました。時代を経て同じ海を眺めていると思うと胸が熱くなります。今の日本も、龍馬さんの時と同じように、みんながひとつにならなくてはいけないように思います。日本のために自分が出来ることをやっていきたいです。
（7月26日　兵庫　D・M　男性）

こんにちは。初めて土佐に来ました。海の道すごいですね。桂浜きれいですね。記念館おもしろいです。こんなところで育った龍馬さんはいいなぁと思います。今度来るときはもっと龍馬について勉強しておきたいです。これからもがんばってください。
（7月27日　東京　C・D　13歳　女子）

結婚から25年が経ち、夫と二人で初めて高知に来ました。子ども達も大きくなり、これからは二人で旅行することが多くなると思います。新婚旅行が京都で、龍馬さんのお墓参りをしました。十年後、二十年後は、子ども達も連れてお墓参りに行きました。三十年後はまた二人に戻って、仲良くお参りに行きたいと思っています。
（7月31日　神奈川　S・S　53歳　女性）

夏休みの家族旅行で来ました。以前より龍馬記念館に行きたいと何度も言っていた息子と一緒に。毎晩布団の中で龍馬の伝記を読んできました。様々な展示物を見て、本よりもさらに龍馬に会えたような気持ちになりました。海の深い音を聴きながら、大きな自由な気持ちに導かれるような気持ちになりました。また来たい場所です。龍馬ありがとう。
（7月31日　岡山　A・S　36歳　女性）

やっとやっと念願叶って、今年龍馬さんに会いに来ることができました。主人は大の龍馬さんファンで、今回が五回目の桂浜です。主人に案内されながらやって来た桂浜、そして龍馬さんの銅像。私が思っていた以上に大きな大きな龍馬さんの姿に圧倒されてしまいました。実は昨年が結婚20年目でした。昨年来れなかった分、今年は心に残る21年目のお祝いとなりました！記念館で見た数々の龍馬さんの手紙は、温かい人柄が感じられるものでした。龍馬さんが見つめた桂浜の海のように、私も強く、優しく、周りの人を包み込む、凛とした女性になりたいです。かしこ
（8月3日　熊本　K・S　49歳　女性）

部活もお盆休みに入ったので神奈川県川崎市から車で来ました。『仁』を見てから、今この世の中に坂本龍馬という人間がいたらもっと平和になるのではないか…と考えることが増えました。部活や学校の中で、龍馬殿が担任だったらよかったです。まだまだ龍馬殿は私の心の中に生き続けています。応援してください。ちなみに部活は女子バスケ部、弱いです。
（8月10日　神奈川　S・Y　14歳　女子）

小学生の時に、龍馬さんに会いに桂浜までやってきました。今回二回目の訪問です。前とまったく変わらない桂浜と龍馬像の姿です。今回も同じメンバーで来ましたが、もう20年もの月日が流れました。龍馬さんのことをもっと知れた、いい一日でした。〝大器晩成〟。人生はまだまだ分かりませんね。志をもっていつまでも。
（8月12日　東京　T・M　35歳　女性）

小さい時、才谷屋と並ぶ浅井で働いていた祖母から「龍馬は小さい時は鼻タレ小僧で寝ションベンタレで気がこんまかった」とろくでもない子どものように聞かされ育ちました。それに引きかえ「慎太郎は勤勉で…」と。要するに東の生まれの祖母は慎太郎びいきだったのかもしれませんが。そんな風に言われた龍馬さんでも大人になったら大きな仕事ができる！ということは、子育ての中で親が一喜一憂せんでも大らかにかまえちょったらいいんだな…と、親となってみると「子どもは大きく化ける」という勇気をもらった気もします。東日本大震災で親御さんをなくしたお子さん方も、哀しみの中に希望をもって大きく成長していって欲しいものですね。見守ってやってください！
（8月12日　高知　E・Y　女性）

15年ほど前に記念館に来ました。「お～い！竜馬」の影響で当時10才と9才の娘が行ってみたい！と声を出してくれたので、行くか！とサンダル履きで横浜からやってきました。時の流れを感じることと、思い出を探りながら楽しい旅です。今回は、その時赤ちゃんだった三女も同行。旅行雑誌をスミズミまで読んだ末、再度来館。どうしても行きたい場所として選びました。歴史が流れる中で、再度来ることができて、とてもうれしいです。
（8月13日　神奈川　Y・F　57歳　男性）

初めての四国に来て、高知で一番楽しみにしていたのが龍馬記念館です。ぼくもお父さんも龍馬のファンで、『龍馬伝』も全部見ました。お父さんが早く行きすぎてゆっくり見れなかったけど楽しかったです。大人になったら一人でゆっくり見たいと思います。
（8月16日　福岡　R・S　11歳　男子）

5回目の桂浜です。初めて息子と来ました。大きな人になって欲しくて「陸杜」とつけましたが、子どもは親の想いとは別の生き方をするものと痛感しています。龍馬さんの心になって見守っていきます。
（8月16日　福岡　H・S　43歳　男性）

初めて土佐に参りました。旧知の友人と二人で、親父二人旅。JRの路線には「大歩危」「小歩危」「後免」と独特な地名が。貴方の時代からあったのでしょう。城下から桂浜までは結構遠く、「貴方は何度くらい浜に」そんなことを考えながら望む太平洋はとても穏やかです。ではまた。
（8月19日　福岡　E・S　45歳　男性）

初めまして。いきなりお手紙すみません。今回は龍馬さんに聞きたいことがたくさんあります。龍馬さんは危険な目にたくさんあったのに死が恐くなかったのですか？失敗がおそろしくなかったのですか？人に裏切られることが怖くはなかったのですか？どうしてそうも多くの人からうらやましがられるほど真っ直ぐに生き抜けられたのですか？私には今、夢も目標もなく毎日をダラダラと生きています。何かに一生懸命に打ち込んだことなどありません。私はあなたが幕末で生きた日々のその心中を知りたいです。
（8月20日　広島　H・W　16歳　女子）

一昨日、新しい総理大臣がミングでこの記念館に来ることができ、何かの縁ではないかと思ってしまいます。本日は台風が接近して風雨も強く、海も荒れています。これからの日本がこの天気のようにならないよう見守っていてください。
（9月2日　東京　N・K　23歳　男性）

龍馬さん、今日はあなたに会いにはるばる千葉から参りました。正直に言いましょう。私はあなたに全く興味がなかった。しかし今は違います。あなたを目指して、今後の社会人生活を過ごしていくことを決めました。あなたは私の目標です。あなたは33才で亡くなられましたが、私は32才で会社を興し、40才であなたのような威風堂々とした立派な社会人になります。そして、余生は地元・千葉のために生き、この国を地元から支えていくことにします。今はまだ未熟者ですが、どうか天国から私の活躍を見届けてください。かならずやります。
（9月2日　千葉　K・M　23歳　男性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

今年の夏も、龍馬記念館はたくさんのお客様で賑わいました。昨年の龍馬ブームで新たに増えた龍馬ファンの多さを実感しています。この夏に皆さんからいただいたパワーをもって、10月のアメリカフォーラム、11月の開館20周年記念イベントの準備を進めていきたいと思います。拝啓龍馬殿の書籍第2弾は10月末に新人物往来社より発売予定です。こちらもご期待ください。

尾﨑　由紀

ここは館長の部屋　森　健志郎

冷えた麦茶で

まさか2日続きになるとは。館前に設置を計画している「シェイクハンド龍馬像」の立つ位置探しである。

西本忠雄、大野良一、吉岡郷継の三氏は像の制作に当たった彫刻家。像は石膏像が現在、富山県の業者に送られ、ブロンズ制作の段階に入っている。11月13日行なわれる龍馬記念館20周年記念式典の除幕式に向けて着々進行中だ。その3人の先生方がお盆も終わった猛暑真っ盛りの一日、館にお見えになった。「像を据える場所じゃがのう」とトレードマークの長髪白髪頭をかしげながら吉岡氏が切り出す。「階段上の広場より、階段下、ずばり玄関前は？」私の言葉が終わらぬ内に西本氏「いかんぜよ。そこは、狭い狭い。龍馬が泣くぜよ」とみなまで言わさぬ迫力でさえぎられた。「階段そのものに細工して台を置くがはどうじゃろう？その上に龍馬さん」言う大野氏は物差し持参である。妙にサマになっている。ああだこうだと夕方近くまで話し合って一応、大野案で決着したつもりであった。「ほんなら、また」で別れたのだから。

ところが次の日、大野氏と吉岡氏が再び現われた。「考えよったら、眠れんなってねえ」二人ともが今日は物差しを持っている。決意のほどがうかがえた。「階段上に台を作る案は、高さが気になる。もし、子供が落ちたら・・」「そうかと言うて、像に柵を設けたら、お墓じゃ。イメージ狂うぜよ」「心の広さに、親しみやすさ、それでいて品格を感じさせる、それが龍馬じゃきのう」。いいおじさんが3人、顔に汗を光らせての〝炎天下談議〟である。通りかかった入館者の皆さんは一様に怪訝そう。そして、館の玄関に下りてくる階段上のやや西より広場にやっと決まった時は、昼食時間を既に越えていた。日焼けで頬はひりひり。それでも、笑顔が途切れない。「えいぜよ」「決まったねえ」。自画自賛である。

シェイクハンド龍馬の完成を待ちわびるファンから、館宛に暑中見舞いが届いた。・・シェイクハンド龍馬との握手を通じて、世界中の人が握手すれば地球は一つに結ばれる・・。「コピーしてくれんかよ」先生方の要望で葉書をコピーしてお渡しした。物置のように狭苦しい応接室で、職員の出してくれた冷えた麦茶のなんとも美味しかったこと。夏の醍醐味であった。

近づいたシェイクハンド龍馬

石膏像が完成。これからブロンズ像に。アトリエ「造」で

私が初めて、その龍馬像の原型を見たのは今年の5月。圧倒的な存在感でこちらに視線を向け、手を差し出す龍馬が立っていた。私も思わず手を出し、握手をして話しをしたくなるその姿にただただ感動をした記憶がある。そんな思いをきっと龍馬記念館に来館してくれる全てのお客様が感じてくれるのではないだろうか。

いよいよ今年の11月13日(日)、館の開館20周年記念の日に握手ができる龍馬「シェイクハンド龍馬像」がここ坂本龍馬記念館に誕生する。有名な桂浜の龍馬像とはまた違う別の魅力ある龍馬像。龍馬の等身大に近く台座も含めて2メートルほど。現在は、富山県にある鋳造所で最終工程となるブロンズ像へと制作中。完成したブロンズ像が楽しみである。

握手ができる、龍馬さんに触れながら話すことができる「シェイクハンド龍馬像」。やはり、完成した龍馬像には最初に握手をしたい－最初に握手をしてもらう子ども達を現在、選考中である。龍馬のように大きく羽ばたいていく子ども達からたくさんの熱い思いがつまった手紙が多く寄せられた。なぜ、シェイクハンド龍馬像と握手をしたいのか。自分の夢に向かう中で龍馬さんと思いを重なり合わせるメッセージ、また東北大震災への思いから龍馬さんに元気をつけてもらいたいというメッセージ。11月13日に握手をしてもらう子ども達には当日、手紙を披露してもらう。熱い思いを抱いた子ども達に会うのが今から楽しみだ。

「シェイクハンド龍馬像」こちらに視線を合わせ、「よく来たね。」と声をかけてくれる気がする。大きな右手を差し出し、私たちを迎えてくれる。心に龍馬の声が響いてくる。桂浜の龍馬像と同じく桂浜にくる多くの方一人一人を心から励ましてくれる。そういう龍馬像になると思う。早く会いたい。今から待ち遠しい。

山中　真優

■龍馬記念館開館20周年記念イベント「今日はみんなぁ龍馬ぜよ」（11月15日）

11月13日の記念式典とは別に、本来の開館記念日である11月15日、龍馬記念館・桂浜にて記念イベントを開催します。当館は龍馬の入口として歩んだ10年を経て、龍馬の殿堂として20年目の節目を迎えることが出来ました。この節目は新たなスタートでもあります。今年３月11日に発生した東日本大震災は、日本だけでなく世界の価値観を変えました。龍馬記念館も新たなステージへと進んでいかなければならない、そんな気がします。当館ではこの記念イベントを祭りではなく、東日本大震災の鎮魂の意味を込めたものにしたいと考えました。集った人たち皆が龍馬になった気持ちで心をひとつにしましょう。11月15日、皆様のご来館をお待ちしております。

■龍馬記念館

★入館無料

★『汗血千里駒』朗読リレー　（午前９時～午後５時 ※途中休憩あり）

坂本龍馬を題材にした史上初の小説「汗血千里駒（かんけつせんりのこま）」をリレー朗読します。朗読は一人５分程度、申込をされた方には事前に台本をお送りします。現代語訳に直した読みやすい本をご用意していますので、奮ってご参加ください。当日参加も可能。

▼『汗血千里駒』朗読リレー参加申込▼　※受付はハガキのみです

氏名、住所、電話番号、年齢、性別、参加可能時間帯を明記の上、下記のあて先までお送りください

〒781-0262　高知市浦戸城山830番地　高知県立坂本龍馬記念館　朗読リレー係

★龍馬かるた大会　（午前11時、午後３時の２回開催）

朗読の休憩時間には、当館制作の人気商品「龍馬かるた」を使ってかるた大会を開催。優勝者には龍馬グッズをプレゼント。参加希望の方は上記の時間に当館２階近江屋へお集まりください。

■桂浜（水族館前）

★「汗血千里駒」ラストシーン朗読　（午後５時30分～）

★手筒花火と維新太鼓のパフォーマンス　（午後６時～６時30分）

東日本大震災鎮魂の思いを込めた、手筒花火（静岡県浜松市三ケ日町手筒保存会）と維新太鼓（土佐乃國龍馬維新太鼓振興会）をご披露いただきます。迫力のパフォーマンスをお楽しみください。

尾崎　由紀

ギャラリー

■「まさに百花繚乱」

８月は、龍馬そして幕末をテーマにしたイラスト展、「百花龍乱」展を開催した。「龍馬伝」をきっかけに、ツイッターを通じて集まった、関西・関東で活動している４人のアーティスト達によるイラストコラボ展である。

４人のぞれぞれのイメージで描かれた作品は、色使いも技法も異なり、表情は様々。凛々しい龍馬やかわいい龍馬、そして中にはどことなく“福山龍馬”に似たものもあって、“四者四様”であった。会場は多彩な幕末絵巻で溢れ、まさに“百花繚乱”な展覧会となった。

また展覧会初日には、アーティスト達による似顔絵の実演や、扇子や提灯等にその場で絵を描いていくライブパフォーマンスも行なわれた。会期が夏休みであったこともあり、たくさんの子供たちが集まり、思いがけないプレゼントを手にし、笑顔で会場を後にしていた。

小島　千穂

■「沢田明子と震災」

東日本大震災から半年以上が過ぎましたが、あの日の惨劇は未だ拭いさられていません。それでも被災地の方々は、未来を考え、将来を見据え、一歩一歩前に進もうとされています。

９・10月のぎゃらりいは「沢田明子展－龍馬と東日本大震災と明子」を開催しています。そこに並ぶ作品は、東日本大震災から様々なインスピレーションを受けた沢田さんが、渾身の力を込めて制作されたものです。

報道から受ける現実はあまりにも惨く、その万感の想いは次々と“うた”になり、「龍馬と震災」という３枚つづりの大作を生み出しました。赤茶けた微妙な墨色で書かれたこの作品は、額へも入らず、まるでその現場をありのまま訴えているかのように思えます。

90歳にして今尚独自の世界を表現し続ける沢田明子さんの計り知れないエネルギーが、静かに力強く私たちに訴えかけてきます。一堂には展示し切れない23点の作品を２回に分けて展示しています。どうぞご覧下さい。そして皆様のご感想を一言お聞かせ頂ければと思います。

中村　昌代

“「龍馬と震災」の作品前で”

入館状況

2011年９月20日現在（開館以来7,207日）

◆総入館者数		3,085,827人
◆最多入館	(2010年５月２日)	6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため)	8人
◆2011年度最多入館	(2011年５月４日)	5,502人
◆2011年度最少入館	(2011年７月19日)	47人

編集後記

全てに東日本大震災の影響を感じる日々の中で、79号の組み立ては最後まで試行錯誤だった気がする。“よしこれでいい！”と納得するより“これでいいのか？”の思いの方が強くなった。震災は“平成の龍馬”登場を、入館者の皆さんのメッセージにまで残っている。なんだかいつもよりは手際よく原稿の出稿が出来ているように感じるのは、やはり職員間にも気合の空気が伝わっているのだと思う。開館20周年は龍馬記念館の新たなるスタートだと言い聞かせながら、意外に余裕でこれを書いた。

（モ）

館だより“飛　騰”第79号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2011（平成23）年10月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者１名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手５枚をお送りください

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「明智光秀と龍馬」

総務省・地域情報化アドバイザー
現代龍馬学会副会長
坂本 世津夫

坂本龍馬に関連した私の研究テーマは、「明智光秀と龍馬」である。本来、私は郷土史や坂本龍馬には詳しくなく、大学では、地域情報学や社会学、哲学の研究をおこなっている。その人間が何故「明智光秀と龍馬」か、と言うと、実は、この二人と、我が先祖（領石や亀岩の坂本家）との間に、何らかの繋がりがあるのではないかと考えているからである。

400年住み続けた場所

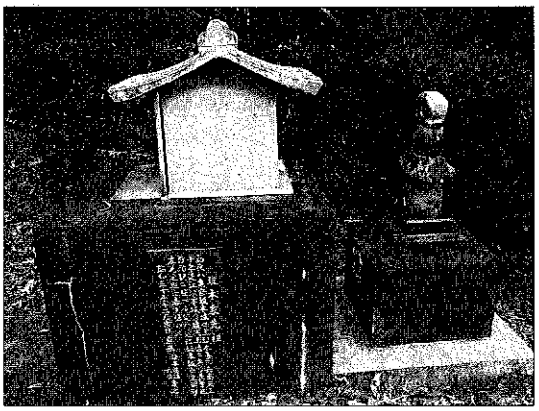
私の家は南国市領石にあるが、多分、400年以上はここに住んでいるのではないかと考えている。本家は亀岩にあり、龍馬の先祖が暮らしていた才谷とも目と鼻の先の距離である（領石・亀岩・才谷は謎のトライアングル）。昨年は、NHK大河ドラマ『龍馬伝』が放送されたし、数年前には『功名が辻』が放送されたが、そこに描かれている土佐は、本来の土佐とはかなり違うのではないかと考えている。それを調べるのが「私のテーマ」（ライフワーク）である。

早速、420年前に飛ぶが、その頃、南国市の北部には長宗我部元親の居城である岡豊城があった。長宗我部元親は、長宗我部氏第20代当主・長宗我部国親の長男で、第21代当主である。母は、美濃斎藤氏の娘（号 祥鳳）。正室は、石谷光政（足利義輝の家臣）の娘で、石谷頼辰・斎藤利三の異父妹である。側室には、明智光秀の妹の娘がいる（側室：小少将、明智光秀の妹の娘）。長宗我部元親の夫人は、天正11年7月22日（1583年）、本能寺の変の翌年に亡くなっている。亡くなった原因も、墓所も不明である。夫人の正式な名は不明であるが、司馬遼太郎の『夏草の賦』では「菜々」という名前が付けられている。父は石谷光政、母は蜷川親順の娘である。そして、長宗我部元親の嫡男である信親（天正14年12月12日（1587年1月20日）戸次川の戦いで死亡、享年22）も、正室は石谷頼辰 女となっている。このように、長宗我部家は、国親、元親、信親と三代にわたり、美濃の斎藤家（土岐氏）関係者から夫人を迎えている。斎藤利三は、明智光秀の重臣であり、前室は斎藤道三の娘であったというが、史料的に明確なものではない。後室は、稲葉一鉄の娘であり、斎藤利宗、斎藤三存、それに末娘の福（春日局）らを産んでいる。そして、福は稲葉重通の養女となり、江戸幕府の第3代将軍徳川家光の乳母となった。福は、山崎の戦い（天正10年（1582年）6月3日（西暦7月2日）、古来「天王山の戦い」と言われている）の後、義理の叔父である長宗我部元親を頼り、土佐の岡豊城で過ごしたという説がある。長宗我部元親が、天正16年（1588年）大高坂山（現在の高知城がある辺り）に城を移し、大高坂が水害が多い為、3年後の天正19年（1591年）浦戸城に居城を移すまで、岡豊（南国市北部地域）は土佐の中心地であった。土佐の国は、想像するよりも遙かに中央（土岐氏の斎藤や明智など）との関係が強かったわけで、中央からの多くの武将や商人（近江商人など）が岡豊城の周辺に居住したことが想像される。

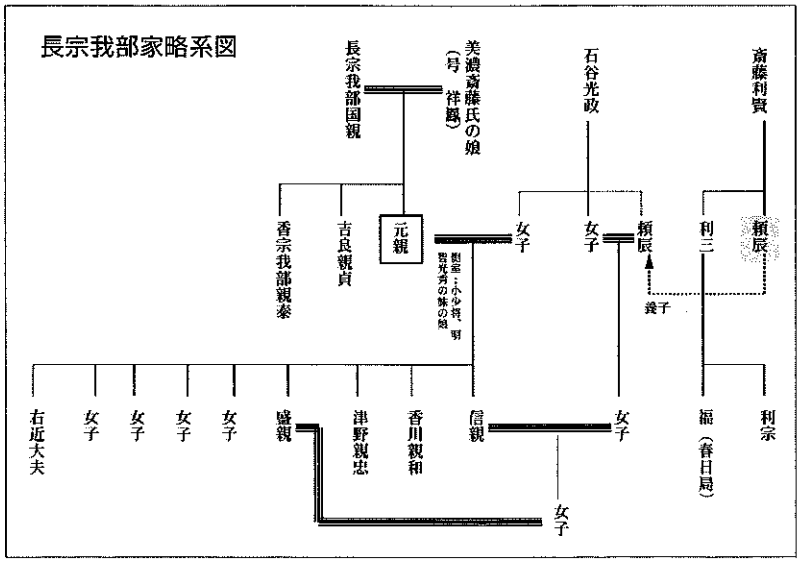
坂本家の先祖をたどる

同じ時期、南国市亀岩には坂本城があり、墓石に「坂本家先祖　初代ハ亀岩坂本城々主坂本喜三兵衛天正十年近江坂本城落城後土佐ニ来リ長曽我部元親ニ任ヘル父は近江坂本城々主明智左馬之助光春ト伝ハル」と書かれた墓もあり、「明智左馬之助光春　妻　明智十兵衛　光秀　長女」と書かれた墓もある。最近の墓石ではあるが、その背後に古い墓石がある。この古い墓石は、斎藤利三の墓と、うり二つである。

坂本龍馬の先祖（土佐での初代）にあたる坂本太郎五郎の墓は、亀岩の隣の谷である才谷にある。太郎五郎は、本能寺の変のあと、明智光春の子どもが土佐に逃れ、旧才谷村に住み着いて百姓になったという根強い伝承があるが、墓の両面には、太郎五郎は本能寺の変より10数年も前に戦乱を避けて山城国から来た者である、と書かれているようである。また、大浜家であるが、長宗我部時代の商人（近江商人）ではないかと推測している。思うに、明智光春の妻は、明智光秀の娘（長女？）ではあるが、坂本太郎五郎の母は、近江商人の女（大浜家の関係者）で、「光秀の娘」の子どもではない、と推測している。戦国時代は、政略の為に色々な形態で婚姻をするので、妻や子どもといっても、現代と同様に考えることはできない。本妻がいれば、側室もいる。場合によっては、離婚し、主人（妻）を変えることもある。太郎五郎は、明智光秀の直接の子孫ではないが、明智一族の子孫ではあることには間違いがないと考えている。



長宗我部家略系図



話題人インタビュー 握手でつながる地球ぜよ

シェイクハンド龍馬を作った彫刻家たち

開館20周年を迎える11月15日。館にブロンズの龍馬像がお目見えする。その名も『シェイクハンド龍馬』。実際に握手できる等身大の彫刻は前代未聞。この龍馬像を造った土佐の彫刻家たちに、制作秘話と想いを聞いてみた。

シェイクハンド龍馬像 除幕式

日時：平成23年11月13日(日)午前11時(予定)より記念館入口にて

奇想天外！〈触れる彫刻〉

――まず最初に「シェイクハンド龍馬像」のいきさつから教えてください

吉岡　「最初、館長から『記念館の前に置くブロンズの龍馬像を造らないか』という話があって西本先生と大野先生にお願いしたんです。さて、どんな龍馬像にしようかと話し合っているうちに、館長から『握手できる龍馬像』の提案が出て、記者発表をしたのが去年の12月25日。それから1ヶ月あまりで、今年の1月31日には大野先生が90センチのエスキス（試作品）を作られて「これはいけそうだ」とブロンズ制作を引き受けることになりました。そして、この6月に原型が完成しました」

西本　「私は以前、館長が李登輝さんに贈るための木彫の龍馬像を造ったんです。そのとき大野さんに「おまん『竜馬がゆく』は読んだかよ？あれを読まんと龍馬像はできんぜよ」なんてことを言われてね。まあ、ではこの際読もうと、読みました。桂浜の龍馬像というのは下から見上げるばかりかと思ったら、最近はやぐらが建って上からも見えるようになっちゅうという。さっそく写真を撮ってきてもろうて、それを観ながら造りました。木彫は白雲の龍馬像を模してますから、今回のシェイクハンド龍馬像のように「新しい龍馬」を造る思いはありませんでした。しかし逆に「握手する龍馬」という発想があまりも斬新すぎて、「あれ？ほんならどうやって造っていくがでよ？」と面食らったんです。私にもある程度、坂本龍馬という人物の下地はあるにしても、木彫の龍馬像が頭からなかなか離れなくて苦労しました。握手する龍馬の形は「彫刻じゃのうて工芸品になりゃあせんろうか」と心配しました（笑）」

大野　「彫刻の問題は握手をする動作「体つき」でした。体の動きを観察すると、握手するために手だけが前にぬっと出るなんてないでしょう？握手するためには、足がまず一歩前に踏み込んだ形にならんかえ？とか、握手するときに人体は7対3ぐらいに傾くんじゃないかな？とかね。まあこんな彫刻は前代未聞なので、その辺が少々苦しんだところです（笑）。龍馬と身長が似たり寄ったりの人に着物を着てもらったんですが、それでも最初はうまいことかなくてね。その人があまりにもスマートすぎた（笑）」

大野 良一さん
（彫刻家　県展彫刻部無鑑査・審査員）

龍馬像の白雲に勝ちたい！

――銅像の発表から原型制作まで、フルスピードでしたね。

大野　「うん、そうかもしれんね。でも、この新しい龍馬像にかけた期間は長い短いという尺度では計れないの。我々『おらんくの龍馬ぞ』という意識が幼い頃から頭の中にしっかり刷り込まれてるからこそ、制作が早かったと思うんです。蓄積した予備知識が頭のなかにぎっしり入った土佐人が造った龍馬像、そこらの県外の人が作ったわけじゃない。そういった特異性があると思うのよ」

西本　「そうやね。昔なじみの龍馬だから、ここまでできた」

大野　「これを造る前、僕は本を読み直したり、何十年ぶりかに桂浜を歩いたんだけど、純粋に桂浜の大きな龍馬像は「おう、やっぱりすごいなぁ」と感動したの。で、僕自身も思いを新たにした。『本山白雲には、是非、勝ちたいなぁ！』とね（笑）」

西本　「それが製作中の合言葉やったきねぇ（笑）」

ブロンズ像は腐食して強くなる

――シェイクハンド龍馬のブロンズ像はもうみなさんご覧になっているんですか？

大野　「いや、まだ見ていません。制作中ですね」

吉岡　「来月の20日までにとにかくブロンズの流し込み、鋳込み作業をやるんです。それはもう、ものすごくややこしい作業ですよ。この石膏像を300から400の部分に分けて鋳型を造る。今その作業がだいたい終わって、空間に金属を流し込む段階に入ったところです」

西本　「ブロンズの厚さが厚ければ厚いほど値段が張るの。だから予算的にも少し薄くするために中子（なかご）を入れる。それは鋳造の腕にかかってます。何トンぐらいになるのか、今の時点ではまだわかりませんけど」

大野　「ブロンズにしたときに、素材の力というのが出てくるの。金属を見たら強いきね。石膏よりも粘土に近いしっとりした感じも出てきて、この写真で見るよりも出来上がってくる作品はもっといいものになると思いますよ」

――ブロンズの色は茶系になるとお伺いしましたが、その色を選んだ理由は？

吉岡　「記念館の建物は壁面のガラスに空が映りこんでブルーになるでしょう、そこにグリーン系の銅像になると、龍馬像が景色の中に沈み込んでしまうんじゃないかと思ったんです」

大野　「うん、そうですね。だいたい龍馬というと緑というイメージというのがおかしなことなんですけどね（笑）。ブロンズは年月を経て大気中で酸化して「緑青（ろくしょう）」という薄い黄緑色になるんです。そのとき像は涙でも流したように白い筋が流れていく。そうして最後に一度像が真っ青になったら緑青の塗膜で腐食が止まるんです。そうするとブロンズはもう何千年経っても腐らない。殷周秦漢（いんしゅうしんかん）という中国の3000年も昔の像が残っていますが、真っ青でしょう。あれが本来のブロンズの色なんですよ」

――ああ、そうだったんですか。ブロンズは腐って、緑青の色になってはじめて強くなるんですね。

大野　「そう、何十年、何百年かけてあいう色になるんだけど、途中で皆が『ベンキ塗ろう』『化粧しよう』と言う。これは嘆かわしいことよ。ミラノのブロンズ像をごらんなさい。腐食していくのを見守っている。だらーっと青い筋が流れゆうけど、それこそ「見ごたえがある」んです。だから、この記念館の前に置くシェイクハンド龍馬像は、「腐っていく経過こそが美しい」とあなたがた記念館の方が言い続けてほしい。誰かが「ベンキ塗って修復せないかん」といっても、『これは良くなりゆう経過です。時間が、この龍馬を完成させます』と言ってほしいんですよ」

西本　「絶対に、ベンキ塗られんぞね」

――はい。心に刻みました（笑）

東北大震災の年に生まれた意味

――最後に、この像が担う役割について思われていることを教えてください。

吉岡　「そう、やはりね、ここには龍馬にあこがれて、龍馬に何か相談したいとか、もうちょっと龍馬を知りたいという人たちが来るでしょう？今までは手紙や、残されたわずかな写真しかなかったけど、今度はそこに、形として姿を見せる龍馬像ができる。これで龍馬はより具体的なものになると思います。しかもそれに直接触れることができるのは珍しいこと。『龍馬と握手できるんだったら記念館に行ってみよう』という人も今後出てくるでしょう。まぁ京都に行けば、龍馬の書簡はたくさんあるし、像もあるお墓もあるけれど、高知に来ないと握手できる龍馬像はない、といわれるようになってほしいですね」

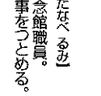
大野　「僕はコペンハーゲンの港にある「人魚像」みたいな存在になってほしい。あんなに小さな像だけど世界中の人が知っている。今度できる龍馬像は、あそこまで有名にならずとも、『高知の桂浜に行ったら大きな像もあるけれど、握手ができる龍馬像もある』とあちこち広まって愛されて、まさに記念館のおへそになる像、忘れ去られていかん像になってくれたら、嬉しいねぇ」

吉岡 郷継さん
（彫刻家　アトリエ造・代表）

西本　「うん、私も大野さんとほぼ同じ思いですねぇ。館長は『この像を前にしたら、龍馬さんに「おぅ、よう来たのう」と言われゆうようなもんにしたいのう』とずっと言っていた。まこと、この像は今後ここに来るお客さんを温かく迎える大きな役割を持つようになるでしょう。館長の言うように、子供も大人もできるだけ多くのみんなぁに、ここに訪れてもらって、この龍馬に「よう来たのぅ」と歓迎する、そういう温かい存在になってくれたらいいと思います」

吉岡　「僕は龍馬の大きさとか強さとか、そういうものをどう造っていこうかと考えていたんだけど、制作の途中で東北地方の大震災があった。そのときにやはり、龍馬のもつ強さやユーモアを含めた『やさしさ』を表現したいと強く思った。今回のシェイクハンド龍馬像は、そういうものが前面に出ている像だと思います。龍馬は当然そういう面を持ってますから。だから、大震災があった年に誕生した龍馬像と思って、かわいがってもらいたい。たとえば渋谷のハチ公の銅像ね、皆が手で触るから下のほうはぴかぴか、つるつるしよるでしょう。日常生活ではそんなに意識しないけれど、『渋谷といえばハチ公やね』と強い印象がある。愛され、触られる。モニュメントというのはそういうものだと思うんです。だからこの龍馬さんもそういう存在になってほしいんですよ」

大野　「そうね。みんなぁが喜んで握手するもんやき、龍馬さんの手がピカピカ光りゆうわ、ほっぺに女性の唇の紅がついちょったり、みんなぁが抱きついたところやら、袖もどこもかしこもピカピカ光りよってほしいよ。高知に来たら龍馬に会いに行こう、握手しに行こう、というてもらえる像になって欲しいねぇ。そして、そう思って来てくれた人の期待を裏切らんくらい、えい像にするつもりですよ！」■



インタビュアー
渡辺 瑠海（わたなべ るみ）
エッセイスト。記念館職員。
現代龍馬学会理事をつとめる。

西本 忠男さん
（彫刻家　県展彫刻部無鑑査・審査員）

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（七）―

『龍馬伝』への悪口

京都国立博物館　宮川　禎一

放送中からさまざまな評判のあった大河ドラマ『龍馬伝』だが、「ドラマですから」と放送中は好意的には見ていた。しかし終了後これくらい時間が経てばその批判を書いても良いだろう。

細かいことはさておいて、薩長同盟締結時における龍馬の役割の描き方に大いに不満があったのだ。

ドラマでは1回分がそれにあてられると聞いて嫌な予感がしていた。どうやってあの「重大な場面」をたった1回で描くのだろうかと。放送では京都の薩摩屋敷で西郷が同盟交渉を始めようとしたら「いや立会人の坂本君が来るのを待とう」と木戸が言い、やがて龍馬がやってくる、そして交渉が成立する、という拍子抜けもきわまった演出だった。

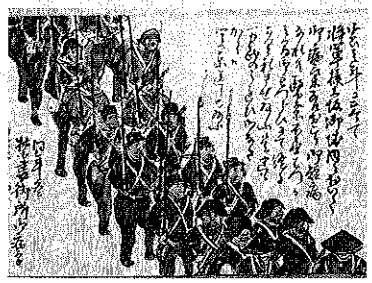
歴史的にこんな場面だったのだろうか？あるいは「龍馬が居なくても同盟はすでに出来ていた」という近年はやりの学説を読みすぎたのだろうか。ドラマなのにまったくドラマチックではなかったのだ。

『龍馬伝』は坂本龍馬をかっこよく描くドラマとしては企画されていなかったということなのか？等身大の龍馬像とはこういう意味なのか？そもそも龍馬の大活躍などは後世の作り話なのか？

視聴者は「なんのうしろだてもない一介の浪士である龍馬が大藩である薩摩と長州の間を周旋し、藩の面子のために同盟を言い出さない木戸と西郷の間にたって怒ったりなだめたりして、苦労の末ようやく同盟を成し遂げ、もって明治維新の方向性は定まった。だから龍馬はすごい」というカタルシスを求めていたはずだ。いままでの小説やドラマではクライマックスとして描かれてきた一番肝心の部分である。それを覆すほどの学説なのだろうか？

歴史が人を動かすのではなく、人が歴史を動かす名場面が見たかったのに…。

ここで言いたいのは学問的に正しいか否かではない。『龍馬伝』の原作者・制作者は「本当はあんまり龍馬のことが好きではないのではないか」という薄ら寒い感想である。



（写真）慶応二年頃の幕府軍洋式歩兵
（『近世珍話』京博蔵より）

コラム・龍馬のこと

オランダ語の手紙

高知新聞編集委員　片岡 雅文

昭和13年11月26日付の高知新聞に、坂本龍馬にまつわる面白い記事が載っていたらしい。「らしい」というのは、いかにもあやふやな言い方だが、昭和13年のその新聞が戦災で焼けて残っておらず、いまのところ確かめようがないからだ。

ただ幸いにも、当時の『土佐史談』（66号）に記事の一部が転載されていて、概略がわかる。そのなかで注目したいのは、

「高知市升形松村正太郎氏の所蔵のうち坂本龍馬が書いた和蘭語の手紙がある」と、記されていることだろう。

何年か前、『土佐史談』でこの記事を見つけたとき、私はちょっと興奮した。龍馬のオランダ語（和蘭語）の手紙？　もしいまも松村氏の家に残されているなら、ぜひ見せてもらいたいものだ。龍馬に対する見方が変わっていくかもしれない……。

松村正太郎氏は、『高知県人名事典』によれば、土佐電気、四国銀行、高知新聞などの取締役をつとめた実業家で、昭和 43年に亡くなっている。しかし、二、三の人に尋ねてもはっきりしたことがわからず、ずっと気になりながらそのままになっていた。

龍馬がオランダ語で書いた手紙は、いったいどこへ行ったのだろう?それがやっと明らかになったのは最近のことだ。私がお世話になっているM先生が、松村氏に仲人をしてもらうほど親しかったという。そこで先生に手紙を出して、松村氏のご子孫に問い合わせてもらえまいかとお願いしたのである。先生はすぐに電話をして、聞いてくださったようだ。

M先生からの返事。「升形にあった松村家は昭和20年の空襲で焼けました。土蔵にしまわれていた書画や文書類も（そのなかに龍馬の手紙もあったのでしょう）、すべて灰になったとのことです」

がっかりとは、まさにこんな場合を言うのだろうと、私は溜息をついた。

“話してみるかよ”

夜明けはいつ

渡辺 瑠海

東北関東大地震から半年が経過した。大津波の衝撃、相次ぐ余震に加え「放射能汚染」に直面、復興への道のりは遠い。知り合いの編集者から来たメールには「放射能は、慣れるよ」と書かれていて、これは衝撃だった。実際のところ日々暮らす彼の率直な感想なのだろう。目に見えず臭いもない放射能は透明のペンキに例えられている。風向きによって大地に塗りたくられた透明のペンキ。「直ちに健康に影響はない」という言葉の空虚さは例えようがない。

私たちは原発の崩壊で日本がいかに小さな島国だったかを思い知った。そしてこの国に他に例を見ないほどの多くの原発が密集されている狂気にもやっと気づいた。黒船来襲を目にした龍馬の驚愕、憂国の想いに気持ちが重なる。

龍馬はこんな歌を残している。「人心けふやきのふとかわる世に独なげきのます鏡哉」土佐弁にすればこういう意味だ。“人の心が昨日と今日とで変わるような世の中を、ひっとり嘆きゆうわよ”

「未来の龍馬」が日本を洗濯するのはではなく、今を生きる人の中にある、地の底から湧き上がるような強い精神ではないかと思うことがある。

龍馬は私たちの心の中にいる。私たちは沈痛な想いの中で、手探りで立ち上がろうとする同志と共に伴走しよう。これからは日本を憂い、日本をどう変えてゆけばよいのか暗中模索しながら、夜明けを待たねばならないのだから。

雲もやがて流れゆく

高知県立坂本龍馬記念館　TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
〒781-0262 高知市浦戸城山830　http://ryoma-kinenkan.jp